

令和八年二月吉日初版作成

直観力と人間神の子観

高嶋 善三郎

目次

- 神の叡智をキャッチできる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - 愛と感謝の心を取り戻す・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
 - 否定的想念や言葉は、死語にする・・・・・・・・・・・・ 4
 - 自らの想念を常に浄める・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
 - 心の中にある、無限なるものに心をあわせる・・・・ 6
 - 今を真剣に生きる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
 - 愛するじこじこ感情移入することの違い・・・・・・・・ 7
 - 周りの人達の肉体人間観の価値観を受け入れない・・ 8
- 本心（神聖）の働きを理解し、直に受け入れる・・・ 8

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブ
サイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。
より分かりやすくするために、感想があわぬが、
お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ） 090-3346-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

神の叡智をキャッチできる

今年の2月号の日々の指針に、「真の目覚めとは、本来すべての人間に備わっている直観力を取り戻すことにあるのである。この直観力こそ、神の光が自由自在に交流している場なのである。」「という昌美先生のお言葉がありますが、直観力とそれを取り戻す方法についても少し整理してください。

フリー百科事典『ウィキペディア』によると、「直観とは、知識の持ち主が熟知している知の領域で持つ、推論など論理操作をさしはさまない直接的かつ即時的な形式である。

また、日本語の直観は、仏教用語プラジュニヤ、般若（の訳語のひとつである直観智に由来する。直観智は分析的な理解である分別智に対する直接的かつ本質的な理解を指し、無分別智とも呼ばれる」と解説されています。

ここで気づくことは、直観は般若心経の般若に由来していることです。この経は、簡単にいえば、肉体人間観から人間神の子観に意識を変容させる方法について言及されているものです。

これからいえることは、直観力とは、端的に言えば、私たちの意識が人間神の子観を完全に取り戻したときに、神の叡智をひらめきとしてキャッチすることができる力といえます。

それを取り戻す方法について、昌美先生が具体的に詳しく解説されています。

『次元上昇』の100ページにおいて、昌美先生は、神聖を復活させるには、肉体の人間になっていったときに失った肉体外の六感（直感）（直覚）（神智）をキャッチできる直観力を養うことであると説明される中で、

直観は、ひらめきであり、心に直接的にひびいてくるもので、特に必要な直観は、否定的観念、暗黒的観念の波動を見極める直観である。この直観を養うことが、神の叡智をキャッチできる力を取り戻す上で重要である。

そのためには、まず、自らが放つ観念と波長が合う、周りの観念を引き寄せくるので、祈り、自らの観念を浄める。そして日頃の自らの観念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的観念や言葉は、死語にし

ていくことを勧められています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らの本心が放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧にうまくいく。幸せて、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれると解説されています。

このお言葉を次のように三つのパートに分けて、実践していく上での留意することを、問題点とその対策に分けて整理したいと思います。

- ① 自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せけるので、祈り、自らの想念を浄めること
- ② 日頃の自らの想念のあり方として、全ての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎこむこと
- ③ 否定的想念や言葉は、死語にしておくこと。

愛と感謝の心を取り戻す

まず②から、整理します。

すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎこむことを常にスムーズに実行していくためには、愛と感謝の心についてはっきり理解することが大事です。

愛と感謝の心は、神様に通じている想いであり、これを忘れ、肉体がすべてと考えたため、神に通じない業想念が発生し、自分の本心を取り巻く業想念が形成され、不調和の状態が生じているのです。この愛と感謝の心を取り戻せば、無限なる智慧と能力を持った神聖が私達自身に現われるのです。愛と感謝を注ぐとは、守護の神霊への感謝の心を常に思い、どのような苦しい立場であろうと、「大難を小難にいただいた」「や」「いい体験をさせていただいた」と感謝し、闇を超えようとしている自分を認め、愛することです。これを続けていくと、自分を取り巻く人たちがすべての自然などに感謝ができ、私達はすべてと一体であり、すべては光に包まれていることに気付くことが出来るのです。

否定的想念や言葉は、死語にする

次に③について見てみましょう。

暗黒的思想について、光明思想と対比してみましましょう。

私たちは、四十九の光明思想を現わす言葉を光明思想徹底行として、日々唱え続けています。

これらの言葉から現れて来るひびきが、「すべては必ず良くなる」「大難を小難にしていた」「いい経験させていた」「運命をひっくり返す」「失敗は、諦めない限り、失敗ではない。必ず成功へつながっていく」などです。

それに対して暗黒的思想は、生命の尊さや素晴らしさを否定する言葉といえます。これらの言葉から広がって来るひびきは、「生きている価値がない」「人のせいだ、自分は不幸になった」「運命から逃れることは出来ない」「取り返しをつかないことをした」などがあります。

前者の言葉を使い続けるべし、己の意識波動は高まり、すべては誤てる想念が消えてゆき、神聖が復活し、輝かしい本体が現われてくることが理解でき、その通りになって来ます。一方後者の言葉を使い続けるべし、自分の意識波動は低くなり、自分自身さえも否定し、すべてがうまくいかなくなり、悲劇的な終焉を迎えることとなります。

浄い言を強ひる

最後に①について、整理します。

直観力を取り戻していない状態の中では、自らの想念を常に浄めることは、簡単なようではなかなか難しいのです。

過去においてやってきた、いいことをしたことよりも、人の心を傷つけたとか、他人に迷惑かけたとかなどの罪意識や、また逆に傷つけられたとか、迷惑を受け、怒りや悲しみ苦しみを抱えるなどの想念がふと思い出され、それに把われてしまうのです。

これらの把われをどのように解消していくかについては、『人間と真実の生き方』にある「この世の中すべての苦悩は人間の過去世から現在にいたる誤る想念が運命となって消えてゆく時に起る姿である。いかなる苦悩といえど現われれば必ず消えるものであるから、消え去るのであるという強い信念と、今からよくなるのであるという善念を起し、どんな困難の中にあっても、自分を赦し人を赦し、自分を愛し人を愛す、愛と真と赦しの言行をなすにつけてゆくとともに、守護霊、守護神への感謝の心をつねに想い、世界平和の祈りを祈りつづける」が不可欠であります。それを実行しても、なかなか把われを手放すことが難しいと思われる方は意外に多いのではないのでしょうか。

なぜこのようになるかというと、私達は幾転生もの長年の習慣から、過去の因果で現在や未来のすべてがきまると誤解してインプリントされ

た親方が、深い潜在意識にまだ残存されていることとなります。

心の中に無限なるもの、無限なるものを心の中にあわす

そこでこの解決のためのポイントとして『人間と真実の生き方』に補充して、昌美先生は、過去の因果で現在や未来はきまらない、過去に放った想念に翻弄されないという真理を果因説として、解説されています。

現在の自分の運命や環境は、その内80%が過去の想念による結果ですが、あと20%は今の自分の想念のあり方に任せられているのです。自分の自由意志と創造力によって、いかようにも創り出してゆけることが出来る。切り開いてゆけることが可能で、また、変えることも自由に行えるのであると言われているのです。

「私（昌美先生）の説くところの果因説は、原因である物質世界を超えたところから、その端を発しているのである。ということとは、先に結果を作り出すことによって、自由の原因がそれに従って入るという法則による方法なのである。この方法でゆくと、結果は自分自身の心の中にあるところになる。有限なる物質世界に焦点を合わせるとゆへにはなく、無限なるものの中にあつて無限なるものをあわすゆへ方法なのである。」

『#せせせせの光明思想』

過去の因果で現在や未来はきまるといふ、誤った親方を潜在意識から浄めるために、時間は過去から未来へ流れてゆへではなく、心の中で目指す結果を決意すれば、それが原因となり、未来から現在、過去へと時間が流れていくとも説かれています。

今を真剣に生きる

解決のための第二のポイントとして考えられるのが、五井先生のお言葉である「今を真剣に生きる」といふことです。

「今は何か。私の言おうとしている今は、現在の時間的今ではなく、天地縦横、永遠につながっている今である。過去世も現在も未来もすべてを含んでいる今なのである。今を開けば永遠がその中にあるのである。故に今を真剣に生きれば、それは空になり、空の中にはやはり永遠の生命が生き切っている。私達の生命のひびきは空からひびいてくるのである。永遠の生命からひびいてくるものなのである。」

今に真剣であるということは、過去世を現在に生かして、現在を未来に生かし、神の永遠の生命を輝かすこととなるのである。

今が永遠にうつらなっているものだと、言じて自己の想念、行動を今の一瞬、一瞬に生かしてゆくものは、輝く神性の显现者であり、栄えある真

我一体の完全な人間像を築き上げ得るのである。例えいかに悪しき過去世をもつものであると、今を生きていることに真剣であれば、過去世の悪行は善行に転回されて、生かされてゆく。故に今の一分一秒はゆるがせにできない。今を無駄に消費することは、生命を殺し、死なせていることになる。「『生命光り輝け』とされています。

この肉体界三次元の世界と高次元の世界は、波動によってつながっているのです。祈りによって私達の意識波動を高めていけば、五次元の世界に行けるのです。また肉体を保持すれば、五次元の世界の自分を三次元の世界に現わすことが出来るのです。高次元の世界には、時間という概念がなく、破壊と創造が同時に行われる世界なのです。ですからこの三次元の世界と高次元の世界は、今という概念でしか繋がっていないのです。今を真剣に生きることが、自分の意識波動を高め、喜びに満ちた愛二元の五次元世界に上昇することになり、過去の誤る想念が存在できる低い波動圏は必ずと光の中に消えてゆくことになるのです。

愛の正しい感情移入の正しい方法

第三のヒントとして考えられるのは、愛の現わし方を正しく理解し、実践することです。私たちは、意外と勘違いをしていますが、

気が付かないことが多いのです。

人は、当の本人自身の苦しみだけでも十分であるのに、家族や友人など自分の周りの苦しみまで背負い込んで苦しんでしまうのです。感情移入によって共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うべきと勘違いしてしまい、正しい愛の現わし方ができなくなるのです。

それはなぜかという点、「感情移入した分だけ、自分の生命エネルギーを無駄遣いしているのです。周りの苦しみから自分を切り離すことができたなら、自分の新鮮な、迷いのない生命力溢れたエネルギーが愛の心となって、癒しの心となって向けられ、いつまでも解決のめどがつかなくなった苦しみに別れを告げ、もう永遠に、苦しみ、悩みに追い込まれることがなくなり、その瞬間から真理への自覚めが始まり、それ以上苦しまなくても済むようになるからである。「のお言葉のように、周りの苦しみから自分を切り離すことが、解決策になるからです。

「真理に自覚めていない人は、なんでもかでも自分の悩みや苦しみに受け止めてしまいが、真理に自覚めた人は、何もかも喜びとして受け止めてゆくのである。そこに人生の明暗の分岐点がある。なぜ喜びとして受け止めることが出来るのか、それはいつも必ず自分の心身と神と一体化しようとしているからである。無限なる愛、無限なる喜び、無限なる

能力、無限ある幸せにならんとして努め、自分の肉体を神の光輝く器にしようとする喜びに溢れているからである。「(昌美先生の著の『真理―苦悩の終焉』)と書かれています。

周りの人達の肉体人間観の価値観を受け入れない

さらに第四のヒントとして考えられるのが、自分の周りにいる、善良と思われる人たちから神に通じない(肉体人間観の)評価基準を無意識のうちに受けとめてしまうことです。

その人たちは、悪げもなく肉体人間観の尺度基準で周りの人たちを評価しようとしているのです。特にマスコミでは、この傾向が強いのです。私達が無意識のうちにこの評価を受け入れてしまうと、その評価に把われ、心の自由が失われてしまうのです。

これらの把われを常に手放さないと、無意識のうちに怒りや悲しみや苦しみが襲ってきて、心が動揺する事態が起こるのです。

これに対して自分の心を常に浄めるための方法は、本心(神聖)の働きを理解し、それを守護の神霊の支援を得て、手放せばよいのです。

自分の神聖に向かって、「私は他人のすべての怒りや苦しみを手放します」「三三三回宣言して、世界平和の祈りをすれば、本心(神聖)はその通

りに邪念(不安、恐怖、迷い)を浄め去ってくれます。

本心(神聖)の働きを理解し、直に受け入れる

これまで肉体人間観になっていったときに失った直観力を取り戻す、養うための留意すべきことを三つのパートに分けてみてきましたが、この三つのパートがそろって機能してくると、私達の意識波動は、飛躍的に上昇していき、直観力を取り戻すことができると言われてい

ます。直観力を取り戻し、維持することができるようになると、本心(神聖)の働きを理解し、直に受け入れることができますようになります。

「本心(神聖)とは、大自然の根源の働きをする生命を、その智慧能力で、大調和達成のために生かすことによってゆく働きである。この神本来の神聖の世界は、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界なのである。」(『続宗教問93』)と五井先生は言われています。

また「本心(神聖)は、私達の肉体人間の外にあるのではなく、チャクラを通して脳天(第七のチャクラ)において、肉体以外の体、つまり幽、霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっている。

神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わってきている心を本心（神聖）と呼ばれている。本心（神聖）は自分の頭の中や心臓の辺にあるのではなく、神のみ心と一つのところにあるのである。

しかし肉体人間の脳天（第七のチャクラ）が神界以外の階層即ち幽界から伝わってきている波動に蔽（おお）われてしまうと、神霊の心そのままの働きはできなくなるのである。そのような時業想念で本心（神聖）を求めても、本心（神聖）を自分のものとして、つかむことはできない。

業想念波動を消滅したところから、本心（神聖）は現れてくるのである。

（『愛の心』）

本心（神聖）は、私達が何を選択するか、また何に意識を集中するかによって、それらを実現するために瞬時にエネルギーを注いでくれます。良い選択等をすれば、いい結果が実現されまし、一方神のみ心から離れたことを選択等をすれば、不調和の姿をそのまま現わします。

また本心（神聖）に宣言すれば、その通りに実現してくれます。

これは、想念を集中して実現を願う念力だと、思われる方もおられるかもしれませんが、神聖の働きを理解した上で宣言することは、祈りと同等になるのです。念力は神そのものへの信仰ではなく、神を離しても行える力であり、この念力に頼っていると、時にはその通りになります

が、そのうち自我が強くなり、神からさらに離れることになり、個人の真実の救われや悟りに入ることも出来なくなるのです。

以上直観力を取り戻す方法について、整理してきましたが、五井先生や昌美先生は、私たちの意識について、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める直観を重要な足掛かりとして肉体人間観から人間神の子観に変容することが、神の叡智をキャッチする直観力を取り戻すことになると言われていることに気づきます。

人間神の子観に自分を変容させていく中で、自分が受けるひらめきや直観智なのか、分別智なのかを一々考える必要はないのです。そのひらめきは直観智といえるのです。たとえそのひらめきによって思うようにいなくなっても、それは私たちの運命を開くための消えてゆく姿であり、また私たちの守護の神霊が、私たちの潜在意識にあるもう一つの業想念を浄め、神との一体感を深めてくれていると考えられるからです。

守護の神霊の、私たちを支援してくれている働きを理解し、それにすべてを全託する信念の深さが直観力を養うともいえます。

このことを心に銘記し、日々の生き方を人間神の子観にもとづいて実践していきたいものです。